

『黒沢家の家じまい』

作

四方田直樹

【登場人物】

黒沢和子（くろさわかずこ） 61歳。長女。飲食関係の仕事。根無し草。 — 和子

引間恵子（ひまけいこ） 59歳。次女。専業主婦。実家の近所に住む。 — 恵子

鈴木結（すずきゆい） 41歳。三女。会社員。東京に暮らす。 — 結

鈴木浩史（すずきひろし） 37歳。結の夫。会社員。 — 浩史

引間実（ひまみのる） 60歳。恵子の夫。 — 実

引間優一（ひまゆういち） 33歳。恵子の息子。実家暮らし。フリーター。 — 優一

引間つぐみ（ひまつぐみ） 27歳。恵子の娘。県内の都市部に住む。 — つぐみ

荒井静枝（あらいしづく） 64歳。和子たちの母の妹（叔母）。 — 静枝

小林かんな（こばやしかんな） 40歳。結の幼馴染。東京に出ていたが帰郷。 — かんな

【上演を検討される方へ — 改変について】

この戯曲は埼玉県西部の山間の地域を舞台にしていますが、上演するにあたって、別の地域、たとえば上演をされている地域やご出身の地方などへ設定を変更いただいても結構です。

具体的には

- ・作中に登場する地名
- ・作中に登場する方言
- ・作中に登場する盆踊り

について変更・潤色に際して、軽微な改変と同様に変更を許可いたします。

「黒沢家の家じまい」

埼玉県の山間部。関越自動車道の最寄り出口から車で40分弱。山の裾野が迫る集落。

黒沢家があつた場所。父母が亡くなり、一男二女の兄妹の中で長男の黒沢勝治（くろさわまさはる）が一人で住んでいたが7年前に他界。しばらく、空き家となっていたが最近、家屋を解体し更地になつている。

3月の日曜日。正午手前。

晴天であるが強めの風が吹いている。

まだ肌寒い。

引間恵子、実夫婦がやつてくる。

実は手に一斗缶で自作した薪ストーブを持っている。

恵子は薪をかくためのトングを持っている。

実 「う～せみい」

実が足をとめ、恵子を見る。

実 「う～せみいですか？」

恵子 「いいんじやねえ？」

実、一斗缶ストーブを地面に置き、着火用ライターで薪に火をつける。

薪の火が落ち着くのを見守る一人。

恵子がタバコを取り出し口にくわえる。

実が恵子のタバコに着火用ライターで火をつける。

恵子、煙を吐く。

実 「わりに風があんな」

恵子 「なあ」

一斗缶ストーブの薪の火も安定してきた様子である。

実 「火も良さげになつてきた。んじや、静枝ちゃん迎えに行つてくんべエ」
恵子 「頼むんな」

実が去つて行く。

恵子は暖を取りつつ、手に持つたトングで薪をつつきつつタバコを吹かしている。

少しして

自動車がやつてくる音。

鈴木結、浩史が使用している自動車。更地の側に路上駐車した様である。

車から降りるドアの音がする。

鈴木結、浩史がやってくる。浩史、手土産（高級な羊羹）の入った紙袋を持っている。

結 「え――――本当に何にもなくなってる」

浩史 「わ――広い」

結 「え――ショックー・」

結が実家のあった土地をぐるぐると歩き、状況を把握しようとする。
浩史は少し離れた場所にいる恵子に挨拶する。

浩史 「こんにちわー」

恵子 「いらっしゃいー」

結 「(浩史に) 庭の木まで無い。真っ平。桜があつたんだよ? 話した事あつたよね?」

浩史 「聞いたかな?」

結 「つつじなんかもあつたんだよ。あと、えつと、木。いろいろ」

浩史 「山が近いねえ」

結 「紫陽花もあつた。思い出した」

結、涙ぐんでいる。

浩史 「びっくりだよね。生まれた家がなくなっちゃつたんじゃ

結は頷き、涙を拭う。

浩史 「お姉さんに挨拶したいな」

結 「うん」

二人、恵子のもとへ歩いてゆく。
恵子、タバコを一斗缶ストーブに投げ捨てる。

結 「こんちは」

恵子 「車どうしたんよ?・」

結 「シェアカーだよ」

結は改めて実家のあった敷地をぐるりと見る。

浩史 「お姉さん(無沙汰)してます」

恵子 「はるばる(どうも)。」

浩史 「(無沙汰)してしまって。あのこれ」

浩史が手土産の紙袋を恵子に差し出す。

恵子、紙袋を受け取りながら

恵子 「氣を使わなくていいんに」

「良いやつでしょ。羊羹」

「どうせなら自分の好きなものをと思いまして」

「タバコなんて吸ってんの」

「ずっとやめてたんだけどね」

「吸ってたの？」

「高校生んとき?」

「何それ」

「お父さんの介護してるときに吸うようになつてヨオ。やめられねえんだわ」

「……ふうん」

「長生きしてえわけでもねえしよ」

「いやいやいや」

「悪かったんね。勝手におつ壊しちまつて」

「家?……任せてたから。お姉ちゃんに……結局誰くるの?」

「ん?」

「今日。お墓参り」

「(浩史に)おばあさん」

「お父さんの妹」

「ブー。お母さんの」

「妹さん。静枝さん。結さんのお母さんの妹」

「そ。(恵子に)優一くんとつぐみちゃんは?」

「優一は居るけどアルバイト中。つぐみはわかんないね。行けたら行くみたいな? 来ないんじやない?」

「甥っ子姪っ子」

「子つて歳でもねえけどね」

「いい大人になつちやつて」

結がストーブの火の上に手をかざす。

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

「元はといえばアンタがここを見たいって言い出したから、じゃあお彼岸には早え

えけど集まってお墓参りするかつてなつたんだんべえよ?」

「ただけど」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

「実さんが? へー。なんかあるの?」

「アンタのためだよ」

「私の?」

結

恵子

浩史

「火いいね」

「懐かしいですね」

「うちのが用意したんよ」

惠子

「アタシは別に、こんなひいて語ったんだけど。『結わやんは更地にしたんじ色々思つところがあるだらうから、気が済むまで呪わせてやんべー』なんてや。『そつすつと寒かんべーな』なんて。」
〔この二句はマメなんな〕

「そうなの？なんかごめん
「余計なお世話ごつた？」

「ううん。あとで実さんにお礼言つとく」

結は実家があつた土地を眺めながら

「じゃ、ちょっと見せせてもらひつね」「お昼の出前12時30分で頼んでるから」

結がスマートフォンで時間を確認する。

「時間くらいか。オツケ!!」

結が浩史の手を引っ張つて、玄関があつた場所に移動。

結
浩史
「この辺りが玄関」
「お邪魔します」

浩史は軽くお辞儀をして引き戸を開けるふり。

浩史 結
「外開きだよ」「え？ うそ」

浩史、外開きで扉を開ける仕草。

浩史 結
「嘘かい」

結
引き戸を開ける仕草。

「ガラガラ～こつちがトイレ。で、居間」

外

「雪はそんなに」

「ああ。ヒートショック。危険な風景だ。」デンジャーノ

浩史

「なんかそれだとあれみたい」

何
?

「キアヌ・リーブスの映画」

「あー。なんだつけそれ」

「スピード」

浩史
「それだ」

結は居間のあつたあたりまで進む。
結が恵子に向かって語りかける。

「アリで結構応かでたんだね」

恵子が結を見て

「うん。平らにしてみるとね。納屋も潰してみたら案外ね」

絶句
一
思
「う
30. うばん

浩史 「いや、大きい家でしたよ」

「前へ前へ」
「前へ前へ」

惠子
「……何？」

卷之三

恵子は興味をなくして、トシケで火をなじます。

「もつたひないですよね。タヌキが住み着いちゃつたんでしたつけ?」

吉

お兄さんが亡くなつてからずっと空き家だつたんでしょ?」

(無効化) 服後(アフターフォローワー)の効能の持続性はどの程度ですか?

卷之三

「勞翁の三回歌」
「三回歌」
「三回歌」

「子どもの頃の」と思い出した。ウチ、お正月とかお祭りの時とか親戚が集まつ

10

「それが彼らの代で無くなっちゃうなんて」「見づらい」と思ふことは、又未だ家へ

じまで。そしたら、そいつもんでしょ!」

「ワン！　ワン！　ワン！」と犬の鳴き声が聞こえてくる。

結たちがその声の方へ振り向く。

小林さんたかやにてくる。紹介してくる。タイトのリード。リードか併せて先に大かしる様子

かんな
「ほら、アツくん行くよもづ」

かんな、リードを引っ張るが、犬は動きたくないらしくその場に座り込んだようだ。

かんな
「もー」

恵子がかんなを呼ぶ。

惠子

かんなは恵子に気がつき、挨拶する。

かんな
「こんにちは～……」

かんなは、恵子の近くにいるのが結だと気がつき、恵子たちがいる場所に近づいてくる。リードが伸び、犬は姿を見せない。

卷之三

「久しぶり。かんなちゃん。すごい! 同じタイミングで帰省?」

「え？」

吉川源氏物語

かんな
そちら
ご結婚した?

「恵子さんから聞いたやつだ。おめでとうござります」

新編　日本書紀傳

結
小林かんなちゃん
幼馴染

かんな
「男前つかまえたね！」

「いや～もう無理かなと思つてたんだけどね。タイミングだよね。かんなちゃんは？」

かんな
「浮いた話は全然
「そつか……おばさん元氣？」

かんな 「死んじゃったんだ。一昨年」

「え? うそ」

「戻ってきてすぐの頃」

「なんかめんなさい」

「ううん」

「そしたら今、あのお父さんと一人なの?」

「そう、あのお父さんと一人。だから犬飼う事にしたんだ。息詰まつちやうから」

「そっか」

「なんでお名前前の子ですか?」

「え?」

「アツくんってことはなんだろ? アイくん? アンデイ?」

「うちの?」

かんなが犬がいるだろう方角を見る。
結と浩史も同じ方向を見る。

かんな 「アヌビス」

「はい?」

「うちの子の名前。アヌビス」

「アヌビス……いい名前ですね」

「そう?」

恵子 「好きなの犬?」

「ハイ」

「近所で、気になる子が散歩してるんだけど声かける勇気がないんだよね?」

「さわってみます?」

かんな 「いいんですか?」

「なんでしたら少しげるっと回ってきます?」

かんながリードを差し出す。

浩史 「わ、ほんとですか?..」

「よかつたじやん」

「いい?」

「ちょっと回ってくるだけね」

浩史 「うん!」

かんなは浩史にリードを手渡す。

浩史 「それではお預かりします」

「どうぞ」

浩史が去る。

「ワン！ ワン！ ワン！」 と犬の鳴き声が聞こえてくる。兎覚えのない人間に對して警戒しているよつた鳴き声。

「吠えられてるな」「不審者と思われたか」「（犬に向かって）アツくん大丈夫！ その人は私の友達のダンナさん！」

二人は浩史が吠えられている姿を見て、結は笑い、恵子は少し、心配する表情。

「大丈夫かさあ」「噛んだらごめん」

「喧嘩しない子だけ」と
「それじゃまあ大丈夫じゃないかな」
「適当なんな」

かんな 恵子 かんな
「（恵子に）なんかあるんですか？」
「何？」
「結ちやん帰つてきて」
「今日は？」

「ああ。別に何つてこともないんだけどさ。帰ってくるつていうからさ、それじゃあ親族でご飯でも食べようかって」

「ああ、そうか」「あ、お家無くなつてから初めて?」
「そう」

かんな
「そつか」

かんながぐるりと黒沢家の家があつた更地を見る。

かんな
「見慣れた景色がなくなつちやつたんで私も驚いた」

「浩史さん、だっけ？ 今は向こうの家なの？」
「ううん。今は夫婦だけ」

「ないない。先はわからないけど……ないない」

結「死」？

「うん。あんまりつるむ相手もいないしね」「無理だよ。私も浩史も仕事あるし」

「かんなちゃんはなんで帰ってきたの？」

「お父さんと仲直りしたんだ？」

かんな
「安月給に耐えかねて、ですよ。意地張つてるのが馬鹿馬鹿しくなつちやつて」

「先月、雪が降った時もお父さんと二人して雪かきしてたじやねえ？」

「恥ずかしい」

「恵子君、恥ずかしいことないでしょうに」

「え? うふ。少しお間違ひござるやうなつも無いからだ。」まあ。ハーベが兼任

いつてわけじやないしね

そういうつしているうちに黒沢和子がやつてくる。田舎にそぐわない原色強めの派手な服装

肩掛けのポーチ。小ぶりのキャリーケースを手に持っている。

時事新報

恵子と結、そしてかんながその声に振り返り和子を見る。

和子 結 「あーあ」 「あ！」

和子は平らになつた土地を見ながら、ポーチの中からポケットティッシュを取り出し、鼻を噛む。

かんな	「こんにちは」
和子	「あれ?覚えてるーえつと」
かんな	「小林です」
和子	「小林?」
かんな	「いいよ。こんなん挨拶しねえでも」
和子	「なんだよ」
かんな	「なんか、懐かしい。ね?」
和子	「なんか?」
かんな	「うん」
和子	「あ、思い出した。かんなちゃん!」
かんな	「そうです」
和子	「あのおつかねえ親父んちの子」
かんな	「そうです」
恵子	「裏面目だつてだけだんべえよ」
和子	「アンタ、昔から人を見る目がないんだから」
恵子	「あんたは悪さして怒られてたんだんべ?」
和子	「子供に遠慮がねえんだよな。まだ元気なの?」
かんな	「ちよつと失礼でしょ?」

かんな

「いいのいいの。ピンピンします」

「ああいう人の方が長生きだつたりするんだよねえ」

和子 「あんた何しにきたん?」

恵子 「お言葉だね。悪い?」

和子 「誰に聞いたの? 今日集まるつて?」「つぐみからなんとなく」

和子が恵子が持つている手土産の紙袋に目をやりつつ

和子 「ね、トイレッてどうしたらいの? アンタんちまで行くの?」「また無心?」

和子 「アンタ、私がいつでも金がないと思ってるんでしょ?」「じゃ、貸した分は返しなよ」

和子 「アンタ、キツくなつたわね性格」

和子が結の方を見る。

和子 「ねえ。そう思わない?」「うーん」

和子 恵子 「勝治の葬式の時貸したんは、いつ返してくれんの?」「よく覚えていなさる」と

和子 「浩史が戻つてくる。伸びたりード。やはり犬の姿は見えない。和子と恵子のやりとりが目に入り遠巻きに足を止める。浩史は和子を勝治の生前中に関係があつた女性であると思いつむ。」

和子 「忘れるわけななかんべよ」

和子 「こここの権利はいらないってことでチャラにしたじゃない」「それは違う話だよ」

和子 「そだつけ?」「お金の話じゃなくて」

和子 「ああ、介護の見返りだ、この家は」

和子 「そういう言い方ないでしょ」

和子 「取り繕つたつてしようがないでしょ?」

結の視線に浩史の姿が入り声をかける。

結 「おかげり」

浩史 「うん」

結 「吠えられた?」

浩史 「最初だけ。いい子でした」

かんな
「ほんと?
(笑)」

浩史がかんにリードを返す。

かんな
じや、
また。
いつまでいるの？

「そつか。またゆづくり会おうよ」かんな

紅葉の歌

「呼び止めて悪かつたんね」

浩史

かんな
「まゝにだいだい」

「そのために帰つてくるわけにはいかないよ」

かんなは手を振つて去る。

種子「詰の田原城」

和子
——ああ、結婚したんだつたよね？

和子
「いい男じゃ

「アーニ、男の歳は二二三三の一

卷之三

「何の年下? どこで捕まえたの?」

浩史 「あの……もしかして勝利さんの」

和子

遺史
「和子さん」

「上のお姉さん……あ、お姉さん！」

「全然！ もつとお苦ハかど

「でしょう？・私の方が若く見えるでしょ？」

浩史 「てっきりあれだと思つちゃいました」
結 「何?」
浩史 「亡くなつたお兄さんがおつきあいしてた方?」

浩史の勘違いに和子と結、大笑いする。

和子 「アハハハハ」
結 「ははは。そ、うかそれですか、なんかそわそわしててや」
浩史 「うん。なんだあ」
惠子 「そ、んなナリだから間違えられんだよ」
結 「和ちゃんとは20違うんだ、歳」
浩史 「そ、うなんですか!」
和子 「40過ぎの恥かき子なんだよね。この子」
浩史 「あ……はあ」
和子 「娘、娘と来てさ、でも男が欲しくてさうちの親。勝治でやつと男の子が生まれて打ち止めにしたんだけど。40過ぎての『無沙汰』のあが当たつて出来たのがこの子なの」

和子 「余計なこと言つんじやねえよ」

浩史 「なんとなくは聞いてます」

惠子 「トイレじやねえん?」

和子 「そ、うそ、漏れそ、漏れそ、アンタんちまでもたないかも」

惠子が地面の一糸を指差す。

和子 「そ、トイレがあつた場所」
惠子 「いじわるだねえ」

和子が惠子の背中を叩く。

惠子 「痛つた!」
和子 「こんなひ、らけたといふで尻だせつていうの? (浩史に) 見たくないよねババアのケツなんて」「え? あーハハハ……」
惠子 「ほら行くよ。(結たちに) まだ見る?」

浩史が結を見る。

結 「うん」
和子 「早くもつ」

惠子と和子が会話をしながら去つてゆく。

「構わないってそういうでしても
「猥褻物陳列罪で捕まっちゃうよ。チンはないけど
「つまんない」と言つてんじゃないよ
「つまんなくても言つちゃうんだよババアだから
「すぐそこなんだから我慢しな」

恵子と和子が完全に去る。

浩史 「愉快人じやのう」
結 「じやろ？ 今どこに住んでるのやう」
浩史 「そんな感じ？」
「前にあつた時は九州の方だつて言つてたけど。その前は長野で……引いた？」
浩史 「事前に聞いてなかつたらヤバめだつたかも」
結 「ヒヒヒ。何、なんでそれで勘違い？」
浩史 「姉妹でも違うんだね」
結 「私と和ちゃん？」
浩史 「いや、恵子さんと」
結 「ああ。恵ちゃんは同じ隣組の幼馴染の実さんと結婚して、ずっといだからね」「ん？」

結は居間のあつたあたりまで進む。

結 「お父さんお母さんが生きてたら孫の顔をさ、見せに帰つて来たり……なんか考え
てたなあ、昔」
浩史 「お姉さんたちには見せられるよ」
結 「見せられるかねえ」
浩史 「ゆいぽんのお母さんだつて40過ぎでゆいぽんが出来たわけだし」
結 「そうだねえ。でもねえ」
浩史 「ん？」

結は右手の親指と人差し指をくつつけて「お金」のジェスチャー。

結 「不妊治療。かかりますよ～」
浩史 「それは今は考えないでつき込む」
結 「ギャンブル～」

結は部屋の間取りを思い出しながらとゝとゝと歩き回る。
ふと、浩史を見て

結 「子ども、出来なかつたらさ」
浩史 「出来るつて」

結 「犬を飼おうよ」
浩史 「……出来るって」

浩史は犬を飼っている姿を想像し、ニヤッと口元を綻ばせる。

結 「ニヤリ?..」

結が浩史の口元を指差す。

浩史 「え? 顔、出ちゃった?」
結 「うん (笑)」
浩史 「ペット禁止じゃないウチ」
結 「引っ越せばいいさ」
浩史 「まあ、そうか……いや、できるって」
結 「天欲しくないの」
浩史 「そしたら犬も飼う」
結 「子どもに犬に引っ越しへ?」

結は右手の親指と人差し指をくっつけて「お金」のジェスチャー。

結 「かかりますよ~」
浩史 「がんばろ」
結 「まかせとけじゃ?..」
浩史 「がんばろう」
結 「え~」

結は再び家があつた場所を見るようにして

結 「ここが残つてたらなあ」
浩史 「え? 通うの?ここから?」
結 「いないうこともないんだよここから東京に通つてる人」

浩史はここから通勤する姿を想像してみる。

浩史 「いや、無理無理」
結 「そうかな?…… (笑) そうだよね」

恵子と和子、そして引間優一がやつてくる。

優一はアルバイトの休憩中に家に食事に戻つてきているため、アルバイトしているコンビニの制服を着ていて。

浩史 「詳しいというか。詳しい人が知り合いでいるけど」「聞いてもらえませんか？」

優一 「うん。いいですよ」

恵子 「あんたが飯途中でしょ」

優一 が自身の腕時計を見て。

優一 「あ、やべえ。あの、じゃあいいかな？俺のプラン」
結 「あ、うん」

結が和子を見る。

和子 「いいわよ。どうでも」

優一 は笑顔を見せた後、浩史を見る。

優一 「今度また聞かせてください」「はい」

優一 、去る。

和子 「なんかどつかで見たわそついえば。電車。公園で」
結 「王子？」
和子 「どこだけ」
浩史 「川崎の方？」
和子 「どうだったかな」
恵子 「(浩史に) 余計なこと言わなくていいですか？」

結と和子、浩史が恵子を見る。

恵子 「クラウドなんとかとか、変な知恵つけさせないでやってください。あの子はその
氣になつてますけど」「何？ 反対なの？」
和子 「反対はしないさ」「じゃ何？」
恵子 「貯めた金でやるならいいさ。借錢してまでやる」とないよ」「クラウドファンディングは投資なのでリスクは少ないと思いますけど」「うまく行くとは思えないもんね」「そう？ いいんじゃないの案外」「来ないつて。電車飾るぐらいじゃこんなとこに人なんか」「やつてみないとわからんといんじやない？」

結 「「」の出じゃないからそんない」と言えるんだよ。浩史は「
浩史 「んーまあねえ。でも「」の広さはちょっと考えやうよね」

自動車がやってくる音がする。近くで停車したようである。
自動車のドアの開閉音が聞こえる。

結 「こんな山の近くじゃ広くても」
浩史 「結構有料道路の近くだし、やりようじゃない？ 住んでた頃はなかったんで
結 「「」だけ……」

自動車から降りた引間つぐみが歩いてくる。

和子が大きく手を振る。

浩史が軽く会釈した後、結に「誰？」と耳打ち。

結 「つぐみ。恵子姉ちゃんちの子」

つぐみやつぐみ。白いスニーカー。手に洋服店の厚手のビニール袋（中に和子の忘れ物
が入っている）。

つぐみ 「こんちわ」
浩史 「どうもご無沙汰です」
結 「(つぐみに) 忘れてたのよ」
つぐみ 「一回会つただけだしね」
浩史 「イメージが違つから。髪なんかくりつくりで」

浩史は自分の耳元で巻き髪を表現する仕草。

結 「言い訳」

結は浩史を見て笑う。

つぐみ 「……」
恵子 「帰つてくるなら連絡よ」しなよ」
つぐみ 「和子おばちゃん来てるって言うから。これ、こないだ来た時の忘れ物」
和子 「ああ、ありがとありがとサンキューべリマッチ」

和子がつぐみから袋を受け取る。

恵子 「(和子に) つぐみんとい」泊まつたの？」
和子 「新潟の方で住み込みの仕事が決まつてさ、つぐみんといからだと新幹線乗れる

「そんなのわざわざ持つて来なくたって
じゃない？ そん時さ、下着をついさ、洗濯力ゴ入れちゃって」

「そんなのわざわざ持つて来なくたって
「シルクなんだよ?」

「知らないって」

「そうだ、つぐみ、忘れないうちに」

和子はポーチからお土産物が入った紙袋を取り出す。

和子
「ほれ」

和子
「京都のあぶらとり紙」

つぐみ
「お小遣いがいいな」

つぐみ
「ありがと」

ハジマリの世界の出来事、ハジマリ

和子
「電車の話」

つぐみ 「ああ。お兄ちゃんの」

「バカだなって思うけど。お兄ちゃん動き出したし。いいんじゃね」

和子
三二二サたつたの?優

和子
「何？」

和子 澄史 「え？」

「うまく行くわけないよ」

「大丈夫ですから」

「でもクラウドファンディングなら」「黒理黒理」

「一緒にやるって人もいるんでしょ?」

「会へたことない人と店なんてできんんですね？」

「ええ」
恵子

浩史は優一の仲間というのがインターネット上の知人だと悟る。

浩史
つぐみ
「……SNS のハオロワー？」
「ツイッターの」

「ツイッター、いや今はエックスか……それは、うーん。難しいかもしない」「ここで商売なんてあんまり考えたく無いですね」

浩史 恵子 和子 恵子 和子 恵子

「売るの？ やっぱり」

「買ひ手がつけばいいけどね」

「え？ そしたら優一さんの電車は？」

「買えっこないって」

「もし、買えてしまつたら？」

「だつたらうちの庭にでも置けばいいわ」

浩史 恵子 浩史 恵子 浩史 恵子

「なるほどお……」「もうちょっと現実味のある話ならなあ」

「だね」

「あんたも何か考えてた？」

「え？ いや、無い無い。そんなの。私の持ち物でもないし」

「結おばちゃんに貸すの？」

「借りない。借りない」

「何さ、あんた？」

「うーん。なんだろね」

会話が途切れる。

和子 恵子 和子 恵子 和子 恵子

「私も一ついい？」

「何？」

「ん……やつぱりなんでもない」

「何だよ」

「らしくない」

「どう？ あのさあ……言いくらいだけどさ……私にはないのかな？」

「ヨウカン？」

和子 つぐみ 浩史 「あーすみません。気が利きませんで、あります。すぐお持ちします」

浩史が車に羊羹を取りに行こうとする。
結が浩史に駆け寄る。

「ちょっと。あれは鈴木の家に持つてく予定のやつでしょ？」
「また買えぱいって。小田急にも京王にも入つてるんだからー！」

「アタシの財布？」 それ

「出す、出すから」

浩史 にこやかに和子たちの方を見て

浩史 「すぐ持つて来ますから」

浩史が去る。

結が浩史を見送りつつ、ゆっくり姉たちの元に戻る。

恵子 「姉貴のそういう『品のないねえと』、ほんと嫌！」
和子 「あんたが『言えって言つたんでしょー?』」

恵子 「『言うか? 普通。急にヨオ!』」

和子 「あの羊羹じゃなかつたら言わなかつたつて！」

恵子 「私に言いなよ。分けてやつたんに！」

和子 「それだつて下品だとか言つくせに！」

恵子 「『言うさ、そりや!』」

和子 「『羊羹なんか買わなければよかつた』」

和子 「なんかごめんね『気を遣わせちやつて』」

和子 「『ほんとだよ』」

和子 「『クッキーのアソートにしどけばよかつた。そつちの方が安かつたし』」

和子 「『あの羊羹は我慢できないのよ私』」

恵子が和子を睨む。

和子はその視線を避けるようにして少し離れた場所に歩いてゆく。

ポーチから電子タバコを取り出して吸おうとして、つぐみを見て思ひとどまる。

恵子もポケットからタバコの箱を取り出し、タバコを一本くわえる。

和子 「ちよちよ（ちよつとまつた）」

つぐみがそのタバコを奪い取り、一斗缶ストーブの中に投げ捨てる。
恵子がつぐみを見る。

つぐみ 「やめてタバコなんか」

恵子 「よかんべよ」

つぐみ 「似合わねえって言つてんの」

恵子 「まあねえ。わかってるよ」

つぐみ 「死に急がないでよ」

恵子 「タバコの一本一本で死にやしないって（全く）今の子はヨオ。それにさ、いつ

死んだつていいんだよ私らなんかは」

つぐみ 「ふざけんなバカ！」

結はつぐみの顔をみて謝る。

結 「ごめん。お母さんが不良になつちゃつたのはみんなおばちゃんたちが悪いの。おばちゃんたちがさ、みんなあんたのお母さんにおじいちゃんのお世話を任せちゃつたからさ。恨むんならおばちゃんたちにして。お母さんを怒らないであげて」

つぐみ 「なんで、そういうとになつたんですか?」

結の携帯電話に着信。
結が画面を確認する。職場からの電話。

結 「うめん。ちょっと仕事の電話」
つぐみ 「……」

結は電話に出るために、恵子たちから距離をとる。

結 「(電話の相手に) はい、鈴木です。いえいえ大丈夫です」

つぐみが結を見つ

つぐみ 「お父さんとお母さんがどんだけ大変だったか。分かってないんだよ」
恵子 「あんただって、大した」とやってねえべよ。勝手に怒つてんじゃないよ」
つぐみ 「だって」
和子 「まあまあ。わかってるよなあつぐみはいい子だもんね~」

和子がつぐみの頭を撫でる。

つぐみ 「もう27なんだけど」
和子 「え? そんなになるんだつけ? そつか」

和子が恵子を見て、つぐみを見る。つぐみに対して「ちゃんと聞える? 私、おつか?」
といふような視線。

つぐみ 「大丈夫だよ」
和子 「ならいいけど」
恵子 「何?」
和子 「別に」

和子が結を見る。

和子 「優一も結も好きだよねえこんなところがさ。あたしはあの人の介護なんてまつひ
つぐみ 「おじいちゃん?」
和子 「うん。よく叩かれたからね。何かつちやあ」
恵子 「そりや、あんたが悪さすっからでしょ?」
和子 「だからってさ。青くなるまで叩く」とねえでしおうよ」
つぐみ 「おじいちゃんが?」

「アタシらの子供の頃は普通だつたんだよ」

「普通じゃないね。結には手を出さなかつた

「手取つてか、うで掛かっておだりつたか、。可憐かつた（レ）」やだ。

惠子
『空取つてからでさか』か
『口愛か』かし
『されに勝治とか』
『ざつ』
『行つ二、三』

「それはよかつた。ごめんね。姉貴らしいことは何もしてやれなくて

「姉貴みたいになれた、らなつて思つた」ともあつたよ

和子 「え? ほんと? いつ?」

「割と最近。全部放り投げてどっかに行きたいなって。でもすぐには、いくら憎い親だからって顔も出さねえとか金借りたまま、悪びれもしねえとかさ。そんなんは

「私は出来ねえからさ。姉貴みたいにはなれねえなつて思つたんよ」

和子 「…………あれ 私 あれたらよね
「そ、うか……」ええ」

和子 恵子
「あるよ」

実と静枝
浩史がやつてくる。

羊羹を取りに行つた浩史が静枝を連れて戻つてきた実と合い、一緒にやつてきている。静枝はハイキングに行くような格好。背にリュックサック。

浩史の手には羊羹屋の紙袋。

電話をしながら結が三人に大きく手を振る。

三ノ恩ノシテノノ

和子
「静枝ちゃん！」

「どうも久しぶり」

実和子さんも来たん?

和子「つぐみが忘れ物曲けてくれたの」

「(つぐみに) 来るなり来るつて言つてくれよ。出前、とつてねえぞ」

つぐみ
——いいよ。そんなの、すぐ帰るから

實をういにればにはいかねんへえよ

卷之三

和子
「私のもないよね

「うん。来るなんて知らなかつたから」

実
優
の分で頼んだのがあるたんべえや

惠子
「優一がでハルハイトが山帰つた山食へるんへえよ」

「わのまいかひえか（惠子）」島呂でかひえか聞、ひづか？

「もう作り始めてるんじゃねえ。聞いてみるけど」

恵子はスマートフォンを取り出し、鰻屋に電話しようとする。

恵子 「(和子に) 食うん?」

和子 「いいの?」

恵子 「3800円」

和子 「え?、自腹?」

実 「いいよいよ。(恵子に) 意地悪いうもんじゃねえよ」

恵子が少し離れて鰻屋に電話。

恵子 「もしもし。出前頼んでた引間ですけどね。あと一つ鰻重追加ってできますかね?」

和子が静枝に声をかける。

和子 「ちょっと驚いたんだけどさ」

静枝 「何?」

和子 「あっちから歩いてくる姿がさ、あれ? お母さん? お母さんが歩いてくるって思っちゃった」

つぐみ 「おばあちゃん?」

和子 「うん。そこまで来て、あ 静枝ちゃんかつて」

静枝 「姉妹だもん」

電話を終えた結が和子たちに合流。
結が静枝に背中から抱きつく。

結 「静枝ちゃん!」

静枝 「おっとっと。結ちゃんお久しぶり」

結 「静枝ちゃん!」

和子 「(結に) 静枝ちゃん、お母さんに似てきたって思わない?」

結 「和ちゃんもそう思つた? だよね」「そう?」

静枝 「お母さんが死んでから、なんか急にそつくりだなって」「DNAが一緒だからやっぱり似てるんじゃないですか?」

つぐみ 「死んじやつたおばあちゃんの代わりってこと?」

結 「そういうんじやなくて」「そう?」

静枝 「そうじゃん」「そうじゃん」

つぐみ 「それでも慕われてるのはありがたいよ。姪っ子に嫌われるよりは」「そ、うだよね……」

つぐみは自らのスマートフォンで何かSNSを見ている。
和子が浩史と結のそばへ。

和子が浩史の持っている羊羹の紙袋を指さして

和子 「それ私のじゃないの？」

浩史 「渡すタイミング測ってました。お姉さんのです」

浩史が和子に羊羹の紙袋を手渡す。

和子 「あー良かった」

結 「静枝ちゃんの分はちゃんと買ってあるから」「

静枝 「気を使わなくていいのに」

実 「相変わらず面白えんな。和子さんはよ」

恵子が電話を終えて戻ってくる。

恵子 「まだ焼く前だつたから追加大丈夫だつて」

静枝 「良かった」

結 「何?」

和子 「うなぎ」

結 「何?」

浩史が結に状況を説明する。

恵子 「そろそろどうだい? ウチに行つてお茶でもいれよつか?」

結 「あーうん……どうしよ?」

静枝 「お茶だつたら、私、ちょっとといい借りてもいい?」

恵子 「何?」

静枝 「水筒にお茶入れてきたんだ。いいでさピクニック気分?」

恵子 「構わねえけど。こんなとこで? 脇を車も通るで?」

静枝 「ここんちが平になつてからさ。一回 やつてみたかつたんだ」

和子 「何茶?」

静枝 「普通のダージリンだよ」

和子 「紅茶」

静枝 「飲む?」

和子 「飲む!」

静枝 「紅茶でもいいの?」

和子 「なんでもいい。温まりたい」

静枝 「私たちも一緒にいい?」

静枝と結、浩史、和子が一斗缶ストーブから離れて場所を探す。

静枝 「この辺にしようか」

静枝はリュックサックからレジャーシートを取り出す。

浩史 「やります。やります」

浩史と結、レジャーシートをひく。
その様子を見ている恵子、実、つぐみ。

実 「おままが」とでも始めるようだいな」

和子 「つぐみ。あんたは〜」

つぐみ 「いいや」

レジャーシートをひき終わり、静枝、結、浩史がそこに座る。
和子はそばに立っている。

静枝がリュックから水筒と紙コップを取り出し、紅茶を人数分注ぐ。

和子 「準備いいね」

静枝 「誰か飲むかなって。一人でも良かつたんだけどね。どうぞ」

浩史 「ありがとうございます」

結と浩史、和子が紙コップを受け取り口をつける。

結 「美味しい」

浩史 「うん」

和子 「あつたか〜い」

静枝 「少し寒いけど。いいねえ」

結 「ね。和ちゃん羊羹食べよっか?・それ

和子 「え?」

和子は羊羹の紙袋を後ろ手に隠す。

和子 「うなぎ食べるつていう前に羊羹はよくないんじゃないかな」

結 「あ、そう」

浩史 「(笑)」

静枝はおもむろに俳句を一句読む。

静枝 「大空へ続く更地を鳥歸る」

和子 「俳句?」

静枝 「うん。和子ちゃんもどう?..」

和子 静枝 「え？ 無理無理」「なんでもいいんだって。今の気持ち。はい」「飲みたいなうなきのお供にいしお酒」

和子 静枝 「和ちゃん」

和子 静枝 「いいでしょ」

和子 静枝 「俳句じゃなくない？」

和子 静枝 「ううん。うなぎは季語。いいじゃない」「でしょ？」

和子 静枝 「夏の季語だけね」

和子 静枝 「ハハハ」

和子 静枝 「静枝さんは方言ないんですね？」

和子 静枝 「ん？」

和子 静枝 「『だんべえや』って。絹さんもたまに出すんですよ」

和子 静枝 「こっちの知り合いと電話してる時とかね」「私はここに生まれじゃないから」

和子 静枝 「あ、そうなんですか」

和子 静枝 「お母さんの方の実家は浦和の方って言わなかつたっけ？」

和子 静枝 「あ、そうか。お母さんの妹さんなんだもんね」「40過ぎてからこっちに越してきたのよ」

和子 静枝 「こんなところに。物好きだよね」

和子 静枝 「いいところじゃない。ウチから歩いて登れる山もあるし。穏やかで。お姉ちゃんいいところに嫁いだなってずっとと思ってたから。うちの人気が亡くなつてその時は東京に住んでたんだけど。意味なくなつて。だつたらここにしようかなつて」

恵子と実、つぐみは一斗缶ストーブで暖をとっている。

つぐみ 「お父さんはいいの？」

実 「何？」

つぐみ 「お母さんがタバコ吸つてるの」

実 「んーやめた方がいいけども。今はな」

つぐみ 「なんで？」

実 「そんだけおじいちゃんのお世話は大変だったんだあ」

つぐみ 「ストレス？」

恵子 「わかんねえけど」

実 「好きにしても、かんべえよ」

つぐみ 「じゃ、私の前で吸つのはやめて。私、赤ちゃんできたから」

恵子と実がつぐみを見る。

実 「何？」

恵子 「赤ちゃん？ 妊娠したん？」

恵子

「赤ちゃん？ 妊娠したん？」

その言葉に結と浩史、和子、静枝も三の方を見る

- つぐみ 「した」
恵子 「あんた彼氏なんていたらん?」
つぐみ 「まあ」
恵子 「智也くん?」
つぐみ 「そんなのとっくに別れた」
実 「おい、そのともやつてえのも俺や知らねえで」
つぐみ 「言つてないからね」
実 「お前 結婚するん?」
つぐみ 「わからん」
実 「子供ができるんじゃあるんだんベエや」
つぐみ 「絶対じゃないでしょ」
恵子 「相手の人は妊娠したって知つてるん?」
つぐみ 「まだ話してない」
実 「なんだいそりや話せねえような相手なんけえ?」
つぐみ 「おつきな声出さないでよ。そんなんじやないって。先週分かっただばっかりだから」
恵子 「お付き合いしてるんじやあ分かったらすぐ伝えるもんでしょう?」
つぐみ 「二人して面倒くさいな。話すんじやなかつた」
実 「なんだつて?」
つぐみ 「もうさ、子供じやねえんだから私の好きにさせて」
実 「そういうわけにもいかんベエよ」
- 結が立ち上がり遠巻きに三人の会話を聞いている。
- 恵子 「まずは相手にでもたつて伝えてよ」
実 「そ、うだよ。一回連れてきてみ」
つぐみ 「早いって」
実 「はええことねえだんべえよ!」
つぐみ 「結婚前提で話しないでよ」
実 「結婚しねえで子どもどうするんさ。一人で育てるんけえ?」
つぐみ 「そ、うかもしれないし。まだ産むとも決めてないし」
実 「はあ?」

結は恵子たちと静枝たちの間、中間地點あたりでつぐみに向かって声をかける。

つぐみ 「産んだほうがいいって」

つぐみと恵子、実が結を見る。

結
つぐみ
「後悔すると思つ」
「結ちゃんには関係ない話なんだから口挟まないでもらえます?」

結
つぐみ
「でも」

結
つぐみ
「悪いんね」

結
つぐみ
「あ、うん」

和子
「結、もう一杯飲む?」

和子
「浩史が結を迎えてゆく。」

浩史
「浩史が結の手を握り

浩史
「家族のことだからさ。ね」

結
つぐみ
「……うん」

二人
「静枝たちのところに戻つてゆく。」

和子
「つぐみが決める」とだからさ」

かんながやつてくる。

結
つぐみ
「かんなちゃん?」

かんな
「早い再会(笑)寒さん。近所に丸聞こえ~」

かんなは恵子たちのところに向かう。

実
かんな
「お騒がせして悪いんね」

「ううん」

つぐみが無言で去るとする。

恵子
「どう行くん?」

つぐみ
「帰る」

実
つぐみ
「話は終わつてねえで」

「近所迷惑なんですよ」

実
つぐみ
「そんな子どもじみた態度じやあ結婚なんて認め、りんねえで」

「結婚認めてほしいなんて言つてねえべんよ」

かんな
「まあまあ」

かんなはつぐみの手を取り、実と恵子のもとに連れ戻す。

かんな
「ちゃんと話。したほうがいいって」

「おせつかい。やめてもらえます?」

かんな
つぐみ

「ちゃんと話。したほうがいいって」

「おせつかい。やめてもらえます?」

恵子
つぐみ
かんな
和子
「つぐみ」
「うちの話なんで」
「そうだよね」
「かんなちゃんもどひへ。 こっちでいっぱい飲まない？ アルコールじゃないけ
ど？」

かんなが和子を見る。

かんな 「ありがとつぐみちゃん」

かんなは再び、つぐみたちを見て

かんな 「私、関係ないけどさ。ちゃんと話した方がいいよ。いじと思つよ。話してみ
いとさ、相手のこいつて案外わかつてなかつたりするからさ」
「そんなことない」
かんな 「面倒くさがつてるともうと面倒くさくなるもんだからさ。実ちゃんも感情的にな
らづにつぐみちゃんの話を聞いてあげてよ」
「こいつがこんな態度じや、そつもいかねえで」

実かんな 「実さん」

「何？」

かんな 「私、10年近く東京行つてたでしょ？ あれ、お父さんに反対されて、結婚ダメ
になつたからなんだ」

「……」

恵子 「そ、うだつたん？」

かんな 「うん。あつたまきちやつて。許せなくつて。出でいつて……やつと最近帰つてき
つたつてわけなんですよ」

実恵子 「……かんなちゃん、そういう話はずりい（狡い）で」

「（笑）」

かんな 恵子 「（つぐみ）あんた今、は泊まつていけねえん？」
つぐみ 「明日仕事ある……けいへ」 こいつわからいけない」ともない

恵子 「お母さんはさ。好きにすりやいいと思つてる」

「おこ」

恵子 「こ、うは言つてるけどお父さんはあんたには甘いかな。結局は大丈夫だよ」

「そ、うな」とねえで

恵子 「事情もわからんねえんじや、何にもわからんねえからさ。な」

「……うん」

結 結、涙が出る。

恵子、つぐみ、実とかんなが結を見る。

恵子 「あんた何泣いてるん?」
結 「だつて、だつてわ～わ～……」
「…」

浩史が結のそばへ

浩史 「なになになに?」
結 「…」

浩史が結の手を握る。

浩史 「なになにどうしたの?」
結 「わかんない」
浩史 「家無くなつたの、寂しくなつちやつた?」
結 「それは今日ずっと思つてた」
浩史 「つぐみちゃんに赤ちゃんできた」と?」
結 「それもある」
浩史 「それだけじゃないの?」
結 「それだけじゃない」
浩史 「どんなこと? 何が悲しくて泣いてるの?」
結 「…わかんないーうー」
浩史 「わかんないか」

浩史は結の肩を抱き、あやすようにゆする。

つぐみ 「おばちゃんてあれに似てるよね」
恵子 「何?」
つぐみ 「ちいかわ」
恵子 「何?」

浩史は結を慰め続けている。

浩史 「寂しいね。寂しいねえ」

つぐみがその様子をスマートフォンで写す。
つぐみ、自撮りモードにして自分も画像に入るようにして。

恵子 「何とつてんのあんた」
つぐみ 「お母さんも」
恵子 「え?」

つぐみ 「ピース」

つぐみと恵子ピースサインをして遠くに結と浩史を収めつつ画像を写す。

結は気持ちを落ち着かせつつある。

和子が恵子たちの元へやってくる。

和子 「ねえ、みんなで撮つてよ」

つぐみ 「いいよ」

かんな 「撮りましょうか?」

つぐみ 「……お願いします」

かんな 「はい」

スマートフォンを構えるかんなの前に画像に収まるだらう距離を置いて一同が並ぶ。

結 「テレビの部屋、この辺りだったでしょ」

和子 「あんたそんな顔で平気?」

結 「え?」

結は化粧崩れを気にする。

恵子 「居間があつたあたりだね。確かに」

かんな 「りますよー」

かんながシャッターを切る。

かんな 「もう一枚~」

かんなが再びシャッターを切る。

かんな 「はい。大丈夫かな?」

かんながスマートフォンをつぐみに返す。
和子が一斗缶ストーブの元に戻つてくる。

和子 「撮ったのラインでちょうどいい」

つぐみ 「うん」

つぐみがすぐさまスマートフォンを操作して和子に画像を送る。
正午になる。町の防災行政無線から12時のチャイムが鳴る。
チャイムはショーベルト「野バラ」のメロディ。

「ハア（もう）12時か。そろそろ家入るんべえ。出前もくるんベニよ」

「かかるよまだ」

「もうさみいかりよ。風邪ひくで」

「チャイムこの曲だつけ？」

「そうだよ」

「あれ？ 秩父音頭じやなかつたつけ？」

「今はこれだよ」

「変わったんだ」

「流れることもある。気がすつけど」

「あれだい。8月に音頭祭りの頃だけ流すんじゃなかつたつけかな？」

「お祭りがあるんですか？ あ、盆踊り？」

「そう。8月14日に」

和子がおもむろに秩父音頭の一振りを踊る。

和子 「案外覚えてるもんだ」

和子 「お姉さん踊れるんですか？」

「え？」

和子 「誰でも踊れるの。こいつらの人は」

和子 「結さんも？」

結が浩史から離れ秩父音頭の一振りを踊る。

浩史 「ほんとだ！ なんで？」

浩史 「運動会でも踊るから」

和子 「そうそう！」

浩史 「運動会で」

和子 「中学の体育祭でもやる」

浩史 「つぐみちゃんも踊れるの？」

つぐみ 「え？」

惠子 「踊れるだろ？」

惠子が秩父音頭の一振りを踊る。

つぐみも惠子に合わせるようにして秩父音頭の一振りを踊る。

和子 「（惠子に）あんた覚えてるんだ？」

和子 「当たり前じゃねえけえ」

「え？ 僕も覚えなくちゃいけませんかね？」

「別に覚えことはねえですよ」

「実さんは踊れないんですか？」

実 「踊れますよ」

実も秩父音頭の一振りを踊る。

浩史 「踊れるんだ!」

結 「だから、習わされるんだって、で、輪になつて踊るの」

結が姉たちを見て

結 「ちょっと輪 (になつて)」

つぐみ 「は? なんで」

和子 「いいじゃんいいじゃん」

和子は恵子とつぐみをうながし、一斗缶ストーブを中心半径1・5メートルくらいに前後等間隔になるように輪になるよう立てる。

結も輪に加わる。かんなと実、静枝は加わらない。踊るのは和子、恵子、結、つぐみ。

和子 「1、2、3でいい?」

和子 「うん」

和子 「オーケー。行くよ! 1、2、3!」

四人が同じ振りで踊り始める。かんなが手拍子を叩く。一踊りしたタイミングで静枝が秩父音頭を謡い始める。四人は踊りを続ける。

合間に実と和子が「コラシヨー」と合いの手を入れたり。1番を歌つたあたりで踊りも手拍子もやめる。

結 「静枝ちゃんどうしたの? うまいね」

静枝 「ちょっとね。昔。覚えたんだ」

浩史 「皆さん歌えるんですか?」

和子 「歌詞はわかるけど静枝ちゃんみたいには歌えない歌えない」

恵子 「なんでわざわざ?」

静枝 「良いじゃない? 地元に民謡があるのって」

恵子 「そう?」

静枝 「こここの生まれの人は当たり前だもんね。あたしは選んでここに住み着いたからさ」

結 「どういうこと?」

静枝 「好きだから。好きだからなんだ? えーと?」

静枝は少し考えてから

静枝 「やりたいことを選べば良いんだよ」

結 浩史 「……私、後悔したんだ」「何？」

「ハクビシンなんかに荒らされないようにもつと気をかけてれば良かったって。月に一回でも帰ってきてさ。掃除したり。手入れしたり」「ハクビシンて何？」

つぐみ 和子 「ハクビシンが住み付いてたんでしょ? 家?」「ハクビシンてなんだっけ?」

つぐみが恵子を見る。

恵子 「私、火、みてから行くから、お父さん、みんなつれってって」「そうすんべ。風邪ひくで」「そうしよ」

和子 浩史 静枝 「(静枝に) たたむの手伝います」「ありがとうございます」「ありがとうございます」

恵子が一斗缶ストーブにトングを入れ、火の様子を見る。浩史と結は静枝を手伝ってレジャーシートを片付ける。

結 静枝 「私、選べるようにする」「そう。そつか」「二人でだよ?」「当たり前でしょ」「だといいんですけど」

かんなが実と恵子に声をかける。

かんな 実 「じゃ、また。お邪魔しました」「悪かったんね」「すみません。こちらこそ」「タケノコ、ちつともうつたん、食べるけ?」「ほんと?」「後で持つてくわ」「取り行くって」「そう。悪いんね」「結ちゃん。今度こそまた」「うん」「じゃあいいかい?」

実を先頭に和子、結、浩史、静枝が引間家へ向かつて去つて行く。かんなは自宅に向かつて去る。

去りながら、結の携帯電話に職場から電話がかかってくる。
結が電話に出る。

結 「もしもし。はい。いえいえ。どうしました？ え？ あの案件60になつたんです
か？」

恵子のもとにつぐみだけが残つている。

つぐみ 「秋の台風で屋根が飛んだんじやなかつたつけ？だから壊したって」

恵子がトングを動かす手を止める。

恵子 「びっくりさせないでよ」
つぐみ 「何？」
恵子 「いや、なんでも……アハハハ」
つぐみ 「何？」
恵子 「まあいつか。ハハハハ」
つぐみ 「なんなの？」
恵子 「おばちゃんたちにはさ、ハクビシンだつて言つてたんだ」
つぐみ 「ハクビシンってなんなの？」
恵子 「それがなんなの？」
恵子 「それが住み着いてどうしようもないからおつ壊したつて言つてあるんだ」
つぐみ 「どういうこと？」
恵子 「ちゃんと掃除してたんだ。ハクビシンでも台風でもなくてさ。住もうと思えば住
めたんだ」
つぐみ 「え？ そうなんだ？」
恵子 「うん」
つぐみ 「じゃなんで？」
恵子 「なんでだろ。でも、おつ壊したくなつてさ。ねえ、さつぱりしたと思わない？」
つぐみ 「スッキリはしたけど……」
恵子 「あーさつぱりした！」

恵子は両手を上げ、伸びをする。

つぐみ 「あのさ」

恵子がつぐみを見る。

つぐみ 「結婚するかはわかんないけど。産むから」

恵子 「あ、そう。そつか。それはまた夜に話すんぐ」

恵子、笑う。

恵子 「水持つて来る」

つぐみ 「何？」

恵子 「火を消す用」

つぐみ 「私持つてくれる」

恵子 「いいって」

つぐみ 「まだ別に何があるってわけじゃないから。バケツどり？」

恵子 「外の水道のとこ。用意してあるから」

つぐみが去る。

恵子は一斗缶ストーブの火を消す前に一服しようと思ふたバコの箱を取りだし、中の一本をくわえる。

恵子はトングで一斗缶の中の薪を動かし、タバコにちよよど良さそうな火を探す。

恵子 「…………」

恵子、気が変わつて、くわえていたタバコを一斗缶ストーブの中に投げ捨てる。

恵子はポケットからタバコの箱を取り出し、ねじり、やはりストーブの中に投げ捨てるよつとして。

恵子 「……」

恵子、気が変わつて、再びポケットに戻す。

恵子、笑う。

結と和子が戻つてくる。

結 「恵ちゃん」

恵子が振り返る。

恵子 「なんか忘れ物？」

「まだうなぎ来なそつだからさ」

「何？」

「先にお墓参り」

「ああ」

「静枝ちゃん花摘んでくるつて。浩史もついてつた
花はもう供えてあるで？」

「うん。でも摘んできたいからつて」

恵子

恵子 「あ、そ。ちょっと待って、水が来るから」

和子 「水?」

恵子 「火」

恵子が一斗缶ストーブを指差す。

和子 「ああ」
和子 「さっきの写真、つぐみからもらつたけどいる?」

和子 「あ、欲しい」
和子 「私、登録してある?」

和子 「してない」
和子 「どうするんだっけ?」

結は和子のスマートフォンを操作して、ラインで知人登録するQRコードを呼び出し。自分
分の携帯電話で読み込み。登録する。

「オッケー」

和子 「恵子、ついでだからあんたも教えてよ」
和子 「全然やつてないんだけど」

恵子 「やつてはいるんだ」
恵子 「入れさせられた」

恵子 「ライングルーピ作るうよ」
恵子 「何?」

結 「ちょっと貸して」

恵子が自分のスマートフォンを取り出し、結に手渡す。

「お姉ちゃんphoneなの?」

恵子 「勝手に決められたんだよ」
恵子 「なんかタッチできないんだけど?」

「壊れる?」

結 「壊れてないよ。アップデート。iOSだと、え? 和ちゃんわかる?」
和子 「聞かないでよ」

「優一とつぐみがやつて来る。」

「優一がつぐみのバケツを持ってやつてている。」

つぐみ 「あれ? 何?」

和子 「先にお墓参り。手を合わせるの忘れてた」
結 「優一くんこれどうすればいいんだっけ?」

優一がバケツを置き、恵子のスマートフォンを受け取り、画面を見る。

優一 「え？ ああ、これはね」

和子 「優一、わかるの？ すごいじゃない」

優一が恵子のスマートフォンを操作し、結に返す。

優一 「はい。これでアプリの色が明るくなつたら使えるから」

和子 「すごいじゃん優一」

優一 「こんなのは誰だつてできるって。じゃあ」

結はスマートフォンを恵子に返す。

恵子 「行くの？ 仕事？」

優一 「うん。働くなきや」

優一が手を振つて去る。

結 「終わった？」

恵子 「まだ」

つぐみがバケツを持ち、水を一斗缶ストーブにかける。

和子 「冷た」

つぐみ 「飛んだ？ ごめん」

結 「(くしゃみ) くしゃみ」

和子と恵子、結を見る。

結 「ごめん。花粉。薬きれてきた」

恵子 「シーズンだ」

結 「春はね」

結がマスクを取り出し、つける。

つぐみはスニーカーが泥まみれなことに気がつき、ショックを受ける。

つぐみ 「あ！」

和子 「あ、泥だらけ！」

和子と恵子、結もそれぞれ自分の履物に視線を落とす。泥がついているがつぐみほどは目立たない。

和子と恵子、結の三人が歩き出し、その後ろをつぐみがバケツを持ってついてゆく。
和子は更地になる前に庭木が茂っていたあたりを見ながら

和子 「切っちゃったんだね、木もみんな」

恵子 「うん」

結 恵子 「昔ほど花をつけなくなつてたんだ」

結 「そつか」

つぐみ 「お母さん。雑巾」

三人が振り返る。足は止まらない。

恵子 「そんな白いの履いて来るから」

三人はそれぞれで笑う。

和子 「美の山のは綺麗に咲くようになつたじゃない?」

恵子 「なんで知つてんの?」

和子 「テレビでやつてた」

恵子 「ああ、そうそつこの間ね」

結 「どれ?」

和子 「サンドイッチマン?」

結 「ああ。よくやつてるよね。タカトシじゃない?」

三人が黒沢家の墓地があると思われる方向に去る。

つぐみは靴の泥を気にしながら

つぐみ 「サイアク~」

つぐみが引間家の方向に去る。

舞台上には火の消えた一斗缶ストーブだけが残っている。

終わり